

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.090-3818-3450 FAX.03-3373-9878
<http://www.tokyohomeless.com>

起承転々 2007年冬 ホームレス事情

笠井和明

まるで、ピリオドが打てない文章を綴っているかのようなのである。

また木枯らしが吹き、街路樹から枯れ葉が舞い散る。人目のつかめ物陰で肩を寄せ震えるおっちゃんらの姿に、泣いたり笑ったり怒ったりの新宿の冬が来る。同じ光景と同じ活動をどれだけ積み重ねたら、何かが変わるのか？そんな問いを胸に彷徨い続ける旅は続く。

早いもので「ホームレス自立支援法」が制定されてから5年の歳月が経った。完全失業率5.4%の「痛みを耐える」と云われ続けて来た時代、名実共に「ホームレス」と云う現象は社会的な認知を得、

法に規定されるまでの存在となった。その善し悪しの議論はさて置いて、時代の趨勢は、ある一つの到達点を目指さざるを得なかったのが現実である。

しかし、

かつてどこかで書いた記憶があるが、問題の健在化はその解決を遅らせる傾向にあるようである。ピークバークの議論がまた振り出しに戻ったかのように開始され、それまで見捨ててきた人々が何か大きな問題が始まったかのような騒ぎ始め、あれやこれやと主張し始める。蚊帳の外に置かれるのはもちろん当事者であり、何も得る事もなく露宿に晒される。それが浮世の性と言われてしまえばそれまでではあるが、あまりにも残酷ではある。

かくして、最新調査の分析結果が先日、発表された。厚生労働省が「ホームレス自立支援法」の見直しを検討するために実施された「平成19年ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）」の分析結果である。どこまで深部にまで踏み込んだのかは置いて、この5年間のホームレス者の生活の記録である。

かつては資料入手するだけで幾日もかかったこの手の報告書も最近はホームページから誰でもダウンロードできるようになっており、この報告書も厚生労働省のページから入手できるので、興味のある方はチャレンジしてもらいたい。

分析結果前に語られていた「ホームレス数の減少」「長期化、高齢化したホームレス」と云う特徴傾向から、より踏み込んだ分析がこの報告書ではなされており、これからピークバーク議論に参加したい者はしっかりと読み込んでおいてもらいたいものであるが、この数値の裏に一人ひとりの人生が横たわっており、所詮はその一部を切り刻んで数値化したものでしかないと云う事を前提として知っていなければなるまい。

「平成19年ホームレスの実態に関する
全国調査（生活実態調査）」の分析結果

ホームレスの実態に関する全国調査検討会

平成19年11月

まあ、その点は繰り返し書くまでもないので、報告書内容の分析に入るが、全体動向的には、「路上から脱却するグループと長期残留グループ」への「分岐」の中、野宿期間の「5年未満」が大幅に減少したは良いが、逆に「5年以上」が前回調査より増え、年齢分布も高齢化にシフトしていると報告されている。これは、私たちが日常的に接している東京の実情とも合致しており、炊出し等に依存する（自省を込めて云うなら依存させてしまった）「長期層」グループが一定数おり、その部分は確実に残留化している傾向を的確に示したものである。

その上に「新規参入層」が出入りするが、野宿歴が浅いと困窮度が相対的に強いだけ、施策参画の意欲は強く、施策を活用するグループとなり、このグループは路上の出入りを繰り返している。そして、その中間に「時々、ドヤ、飯場等」「病院、施設、センター等」の「時々路上、時々そうでない場所」の「再流入層」のグループが両極のグループを行ったり来たりと、そんな図である。

この「長期層」「再参入層」「新規参入層」のグループのどこに光を当てるのかによって今後の議論の仕方も変わってくるが、少なくともこの3つの「野宿経験」グループの存在を調査から引き出し、それぞれの特徴に基づき今後の施策見直しが必要である事を明示した事は一歩前進である。

また、この報告書では支援制度の利用タイプも分類を進め、「制度利用なし」と巡回相談、シェルター、センター、その他支援のそれぞれの「制度利用あり」タイプに分類して、それぞれの特性やニーズ把握も試みている。この試みの意図はいまいち不明であるが、ここでは際立った差異があまり見られないようである。

今後の希望について、「きちんと就職して働きたい」のパーセンテージが前回調査から減少し、「今のままでいい」が増加した事が話題になっていたが、



この件について報告書では「年齢構成が就労の展望が少ない高齢者により傾いた」ことを一つの理由としてあげている。他方で65歳以上を除いた年齢階層で「きちんと就職したい」の割合が前回調査よりも減少している理由については明らかにされていない。けれど、当然の事ながら、「きちんと就職したい」の割合は「長期層」が最も低く（27%）、「新規流入層」が最も高い（51%）。「今のままでいい」はだいたいその逆である。求職活動状況もまた同じ傾向にあり、この5年の中で、「長期層」の存在、支援する側からで言えば「長期層」をグループとして固定化させてしまったことが全体の就労への意欲を低下させている一つの原因であるようにも思える。報告書が示した高齢化の問題と「長期層」を加味すると就労意欲の低下傾向はだいたいのところで理解できる。

「長期層」は一般的にテント生活等、固定的な生活形態を辿る。そこで東京都が特定公園で地域限定型で実施した地域生活以降支援事業のこれまでの事業終了者（3年経過者）の統計（中間報告）を見てみると、「自立」が11.8%に過ぎず、「生活保護」は63%を超えている。かなり乱暴な分析ではあるが、ここから見ても「長期層」が「きちんと就職したい」と例え願っていたとしても、その現実はこの時期は景気回復期であるが、それでも）きわめて厳しい事が明らかにされている。二文法で受け止められると心外なので、こうとも言える。「行政等から何らかの支援を受けながら軽い仕事をしながら生計を維持する」ことは可能であるが、「自力でアパート等に転居し就労の収入を軸に都市生活を送る」ことは極めて困難であると云う結果である。

報告書に戻れば、「野宿経験」別の就職するために望む支援の項での、「長期層」の方が「仕事を先を開拓」が若干多く、「新規参入層」の方が「職業訓練・講習」が若干多いと云う傾向も、実情に即しているかもしれない。要は、「自分を高める」より「自分達ができる仕事が欲しい」と云う欲求の方が勝るのは、長い間、野宿に苦しめられた高齢者の致し方のない現実である。もちろん、「住所設定のためのアパート」要求がどの層でも、最も高いのはこれは極めて当然であり、健全である。

「野宿経験」別の分類で、尚且つ自立支援の概念で考えれば、「新規流入層」は従前の自立支援システム等の就労を軸にした支援、「再流入層」に対しては再チャレンジが可能な支援、「長期層」は生活

保護等で生活を支え、軽作業労働を軸にした就労の支援が、実施されなければならないと思うのであるが、この報告書はそこまで踏み込まず、「きめ細かい検討」「多様なメニューの可能性の検討」が必要とされている。もちろん、私のような乱暴な結論をすぐに出さず、検討を重ねていかなければならないと思うのであるが、なにせ人が路上に暮らしているのである。早急に検討を始めないことには、「長期層」そして「支援制度利用なし型」が増え続けていくような気がするのである。

この報告書で、今の地点の「ホームレス事情」のかなりの部分の分析が進んで来た。ちゃぶ台ひっくり返す気分が「こんなん駄目だ」と批判する部分（その実、国がやっているから批判するだけなのであるが）もあるだろうが、だいたいそう云うのに限って、しっかりと他者の文章を読み込んでいない者達である。どの時代にも唯我独尊の者はいたので、ここで全面展開はしないが、少なくともホームレス支援をする者であれば読み込んで無駄な事は決してない報告書である事は間違いはない。これを基準にして揚げ足取りのピーチクパーチク議論は止め、再出発（再構築？）する事を期待したいものである。

まず、「ホームレス」と云う単一の概念だけで支援が出来る程、単純な問題ではないと云う事、もちろん、最終目的は路上からの脱却であり、本人達が一番望んでいるよう「アパート等で地域で普通に暮らしていきたい」ではあるが、それにしても、そのプロセスは決して単純なものではないと云う事、ある人は一直線で駆け登れるかも知れないが、途中で踊り場で休まなければならない人もいるし、別のスロップ付きの階段を作ってしまった方が良い人もいる。気が変わって駆け下ったり、飛び降りたりする人がいるかもしれないが、そう云う人ももう一度、一緒に登りましょうよと背中をそっと押してくれる人も必要なのである。

かつて、こんな事を散々書いたことがあるが、まさにそれが「やり直しのできる社会」なのである。

東京に話しを戻せば、当事者達には熱狂的に受け入れられ、一部支援者、マスコミに熱狂的に批判された「地域生活移行支援事業」が今年度実施分を最後に終了し、来年度から既存の「自立支援システム」と統合し、「自立支援システムの再構築」と名を変え新たな仕組みで再スタートするとの事である。

「地域生活移行支援事業」の評価議論は、もはや付き合っているのも嫌になるくらいであるが、事業

終了者が続出している今年から「3年目で追い出されるんだって」「また公園でテントが増えるんだって」などと云う流言飛語がどこからともなく飛び交い、取材に来るマスコミ連中も同じような事を聞き、そうかと思えば、「自立率が低い」などと、事業への評価基準に関する誤った情報が都庁の内部からも聞こえと、まあ散々な終末である。

3年終わって、テント生活者がまた元通りになったかどうか、またアパートから追い出された者がどれだけ新宿に舞い戻って来たか、実際の公園に来てもらって勝手に調べて回れば良いだけの話だから良いのであるが（実際は前述の通り3年経って自力でアパート転宅できな者のほとんどは、生活保護制度等を利用し継続して地域生活を送っている。生活保護なんて簡単に適用されないなんて云う幻想がこの種の噂を増長させる。3年も努力して一定基準以上に収入が増えない者に生活保護適用されなければ一体、誰にされると云うのであろうか・・・）、評価基準をめぐっての議論はこれはもう都の情報操作ミスと云わざるを得ない。端的に云って、この事業の評価は、何人の路上生活者を借り上げアパートに移行させ、そして定着させたのかにある。就労自立が目的の「自立支援センター」の評価基準は、もちろん、何人の路上生活者を就労自立させたのかにある訳だが、この同じ基準を「自立支援センター」とは質の違う「地域生活移行支援事業」に当てはめたとして何の意味があるのであろうか。

云うまでもなく「自立支援センター」は就労意欲があり、就労自立が可能と公的にアセスメントされた者が参画する事業であり、就労率が高い（それでも50%台ではあるが）のは当然である。

他方、「地域生活移行支援事業」は、就労意欲の有無は関係なく、低家賃住宅でのアパート生活を希望する者をくまなく参加させようと計画され（少なくとも平成16年、17年度事業

路上生活者対策事業再構築について

平成19年8月

路上生活者対策事業再構築検討会

は)、実施された事業である。そこでの制約は対象地域内で起居していたかしていないかだけである。そして、まずは低家賃住宅に起居し、地域生活の基礎を作り、公的就労により就労習慣を取り戻し、その後の個々の自立計画は生活サポート団体を介し、方向性をたてようとする事業である。また、そこに介在する就労サポートも、その人の能力に見合った軽易な仕事を開拓し、紹介する事を目的としたので、家賃分も自力で支払って生計を営むと云うモデルケースにあてはめて支援してきた訳ではない。さすれば、当然月家賃3000円なら生活できる者も、事業が終了すれば家賃負担が増え、トータルで生活保護基準以下の収入となり保護対象になるものが多く現われるなんて事は、事業当初から想定されていた事である。それを今になって「自立率が低い」「生活保護率が高い」なんて非難されたのでは、何のこっちゃと言わざるを得ない。この事業の結果(まだ中間ではあるが)が示しているのは、「長期層」の路上生活者の自立支援は、何らかの公的な支援でその生活を支えて行かなければ地域生活に戻れない傾向が強いと云う実証である。その「何らか」は低家賃制度であるかも知れないし、公的就労かも知れないし、生活保護制度かも知れないと云うだけである。

おそらく「地域生活移行支援事業」に対しての都庁内での予算措置関連での駆け引き議論が表に出回ったのであろうが、脇が甘いと云うか、何と言おうか、例によっていつもの調子である。

せっかくの事業も、このようにまともな終わり方をしない中で、次の施策がどのようなものになるのか、高が知れていると思わざるを得ないところに、今日の私たちの絶望感がある。

来年度からの新事業は今流行の効率性が目指され

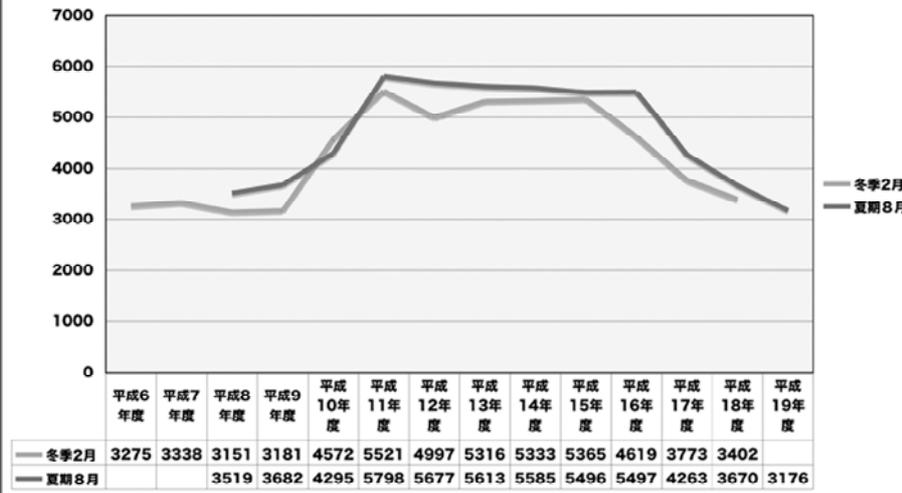
ている。ここでは、前々から指摘している、山谷対策と路上対策の二重化する非効率的システムの改変などはもちろん議題にはあがってはいない。緊急一時保護センターと自立支援センターを合併させ、他施策との連携重視が効率的であると考えられている。

そこには、先の分析が導いた視点は、ある意味無視され、支援制度利用なしのグループを比較的施策に誘導し易い「シェルター部分」の間口を狭め、比較的求職意欲の高い「新規参入層」のみに軸足を置いたシステムのようなものである。再三要求してきた「再参入層」の再チャレンジは流石に認める方向に動いているものの、全体のシステム枠の縮小の中、どこまで認められるのかは不明である。そして、問題なのは「長期層」への対応が、ほとんど射程に入っていない事である。「長期層」=テント生活層と云う図式は的外れではないものの、それが全てかと云われれば、東京の場合は決してそうではない。「地域生活移行支援事業」である程度の規模、テント生活層を重点的に施策化したからと云って、今後は知り



ませんよでは済まない。野宿が「長期化」する形態も多様化している。かつてのようにテントが安易に貼れない状況の中、半固定的な生活形態を採る者も多く、駅舎等でそれらの者が滞留しているのが東京の現状である。それらの者に対して生活保護を軸にした施策が打てるかと云えば、そのような状況に各福祉事務所はなく、どうしてもそれまでの「つなぎ」施策は必要であり、そのツールがない来年度以降、どのように対応するの

23区(国管轄部を除く) 路上生活者概数調査推移



か、ある意味、ここに東京のホームレス対策の決定軸があるように思われる。

とは適当お茶濁しておけ。
何とも因果な浮世であろうか。

走りながら考える手法はもうそろそろ止めにし
て、立ち止まってじっくり考えてから走ればよいも
のを、こうやって東京都の側もまた的外れなピーチ
クパーチク状態を続け、的外れな施策の改変をしよう
としている。

そんな中でも冬が来て、異常気象なので何がある
か分かりはしない。

私たちは、せめて、死なないよう、死なないよう、
暖を囲むことしか出来ないのか。

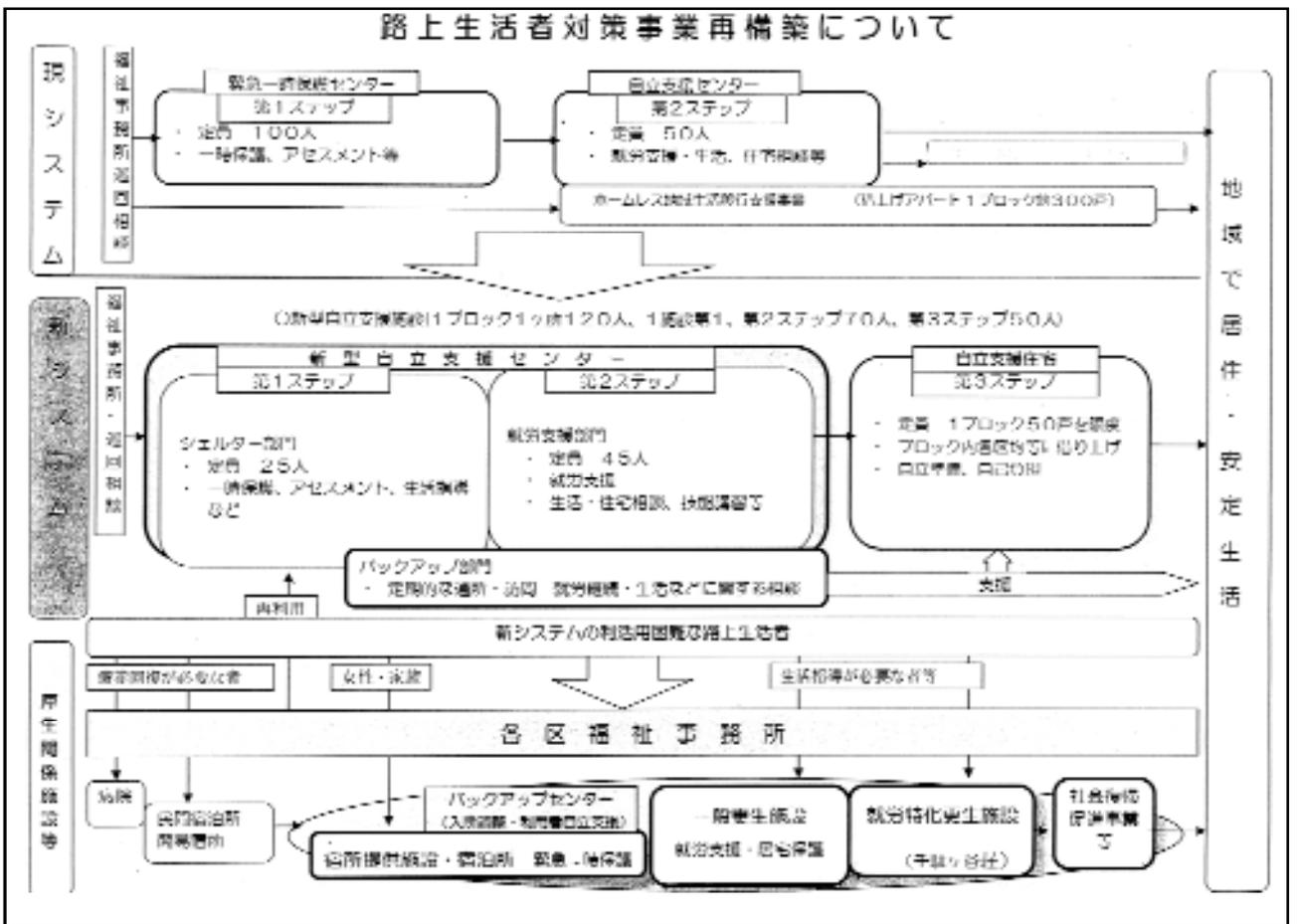
(了)

まさに、右を向いても左を向いても、どちらもど
っちである。

「痛み」を過ぎ、不感症になり、厭世観すら漂い
始めた路上の底部に手を差し込まないで、上辺だけ
をさらっていったとしても、そこには累積する沈殿
物が地面にこびりつくだけである。その悲劇に気付
いた時、また一からやり直していたら、それこそい
くら予算があたって足りやしない。



野宿が固定化されたら、そりゃ辛かんべ。毎年、
冬なるとそう思う。が、春になれば忘れ、夏には邪
魔くさくなる。そんなシーズンを十数年も繰り返し、
幾多の予算と幾多の人材を投入し、それでも尚且つ
出口が見えない。見えたと思ったらすぐ隠し、あー
でもない、こーでもない。路上の人々が呆れてしま
えば、「意欲なし」のレッテルで、施策は縮小、あ



炎天下の中、新宿夏まつり550名の仲間が中央公園に集まり盛大に開催されました。

第14回新宿夏まつりは、今年は前夜祭、本祭ともに中央公園「水の広場」で8月11日～12日に開催されました。

今年の夏は記録的な猛暑。連日30度を越す猛暑の中、準備に準備を重ね当日を迎えると公園のアスファルトの照り返しに目が開けられないほど。日陰が少ない場所だけに汗だくになりながら会場設営。祭壇、炊き出しテント、医療相談テント、物資テントが完成すると物資が次々に運びこまれました。

夕方になると仲間が続々と参集。中央に設置された祭壇の前に集まり、今年一年亡くなった22名の仲間にも手を合わせる。僧侶の方も来てくれ150名近くの仲間による追悼会がしめやかにとりおこなわれました。

続いて、カラオケ大会、そうめんの配食、そして映画会を夜遅くまで開催し、ヒートアイランドの都庁の下で皆で一緒に寝、本祭の日を迎えました。12日も相も変わらぬ炎天下。それでも昼の炊き出しから200名近くが参加、かき氷や床屋サービスには長い列ができ、パン食い競争やらのゲームにも夏に負けじと多くの仲間が参加し、一等賞を競いあいました。今年は医療テントの中で一般の相談の他「あんま」「歯科」のサービスも。こちらも盛況でした。



夕方からは恒例のスイカ割り競争。10個のスイカと格闘し、いよいよ、晩飯と納涼コンサートの時間。既に550名近くもの仲間が集まり、広い公園もこの時ばかりは狭く感じました。今年の夏祭り弁当はカレーライス。手作りのカレーで腹を満たし、ウーロン杯で少し酔ってからコンサートに突入。今年はコマ回しの平野さん親子の路上芸、そして玉木バンド、越路姉妹、五十嵐正史とソウルブラザーズとおなじみの面々ながらも夏の新宿の夜空の中、路上のおっちゃん達と一緒においにも盛り上がりました。

そして最後は盆踊りを皆で踊って、暑い暑い夏まつりが無事終了しました。協力して頂いた皆さん、本当にありがとうございました。



10月9日全国ネット厚生労働省と代表交渉

厚生労働省の来年度以降の動きですが、厚生労働省はすでに来年度予算の概算要求を発表しており、ホームレスの自立支援として31億を財務当局に要求をしています。昨年度に比すれば若干の減はあるが、ほぼ同額であり、ここからも、東京都とは違い、「減った、減った」と喜び、施策を収束させようとは思っていないようです。そんな中の10月9日、ホームレス支援全国ネットの九州、大阪、神奈川、東京、新潟の代表団10数名で国会議員4名の立ち合いの元、厚生労働省、国土交通省との話し合いがも

たれ、主に住宅関連の施策強化の要望での議論をしてきました。住宅関連施策はこれまで国施策としては弱く、また、厚生労働省と国土交通省との連携があまりなされていなかった事が明らかになり、この点での詰めた要望を行って来ました。全国ネットの国への要望も多岐に亘るので、もちろん一度で議論が済む訳もなく、継続して話し合いを続ける事を確認しました。それも含め、基本方針の見直しにあたり、全国の仲間の意見、要望をしっかりと反映させていけるよう、引き続き、各政党の議員への働きかけも行っているところです。とりわけ肝心な、そして国の所轄である就労支援策に関する議論はこれからであり、一般就労のみならず、多様な就労、多様な自立形態に関して、俺たちも内部の議論を更に深め、国にしっかりと仕事をしてもらおうつもりです。単に国が悪いとほざくのではなく、当事者自らの自助努力、民間サイドの企画力も含め、トータルでの議論が求められており、議論を深め、来年の春に向け花をしっかりと咲かせていきたいと思ひます。

新宿の長老 松本勇二さん逝く

二号続けて訃報を書くのは辛いものがあります。
新宿連絡会結成当初から新宿の地で仲間と共にたたかってきた、新宿の長老、松ちゃんこと、松本勇二さんが9月16日入院先の病院にて息を引き取りました。享年81歳、立派な大往生でした。

松本さんは94年、仕事帰りに渦中の新宿4街路の地にたまたま立ち寄り、置いていた荷物を東京都に撤去され、また、目の前で若い仲間達が都の横暴に晒されている事に義憤を感じ、路上のたたかいに身を投じて行きました。仲間の会結成時は得意の料理を仲間に振る舞い、またあらゆるたたかいには先頭を切り仲間を鼓舞し続けました。また茶目っ気もたっぷりで多くの支援者からも愛され、いつの間にか「新宿の長老」としてその存在感は絶大なものでした。96年1・24強制排除阻止闘争の時、若い仲間が逮捕されそうになるのを消火器噴霧の一撃で救い出すなどエピソードは数え切れません。仲間が路上で野垂れ死にをする度に祭壇の前で号泣する姿は今も忘れられません。

98年、西口地下火災で西口を撤退する前夜の最後の晩餐、そして、笑いながらなぎさ寮に避難し、一時は生活保護となりましたが、数ヶ月もすると中央公園ちろりん村に戻り、当然のよう、たたかいに復帰していました。訪れると必ず、あれ食べてけ、これ飲んでいけと、接待付け、好きな酒も弱くなり、足が凭れ、炊出し現場からかつがれてテントまで辿りついてあ顔で「おひよ～」と笑われると、何もかも許せました。



あくまで自力で生きようとし、「地域生活以降支援事業」も拒否しましたが、そんな松ちゃんも歳には勝てず、身体の弱った昨年1月から生活保護を再び受給、大久保にある宿泊所の生活に入り、そしてそこで脳出血で倒れ8月に入院、そして帰らぬ人となりました。

新宿連絡会は松ちゃんの子供です。松ちゃんのようになろうと、松ちゃんと共に新宿で生き、そして歩いて来ました。

けれど、まだまだ仲間が寒空で死んで行くよね、足りない事は一杯あるよね、松ちゃん。生きてる間に実現できずに、本当にゴメン。駄目な息子で本当にゴメン、松ちゃん！

新宿連絡会

2007年7月～10月会計報告

連絡会活動への物品カンパ、現金カンパありがとうございました。

収入)		支出)	
炊出部門寄付	74,000	炊出し事業費	200,153
通信部門寄付	5,000	諸活動費	206,658
活動部門寄付	37,000	教宣活動事業費	153,625
医療部門寄付	5,000	事務費	24,066
夏まつり寄付	42,000	文化娯楽(夏まつり)費	455,503
その他寄付	42,000	池袋関連事業費	40,000
借入金(繰越し債務)	1,669,665	雑費	9,520
		返済金	785,140
合計)	1,874,665	合計)	1,874,665

新宿越年越冬事業のため、引き続き現金カンパ、物品カンパを宜しくお願い致します。新宿連絡会は皆様方からの寄付を一円たりとも無駄なく仲間のために使い切ります。越冬カンパは<http://www.gambanpo.net/>からも可能です。

2007~2008

真冬な冬

第14次新宿越年越冬

2007年12月29日(土) ~ 2008年1月4日(金)

<ところ> 新宿中央公園~水の広場

主催・新宿連絡会
090-3818-3450

越冬闘争資金カンパ
米、毛布、冬物衣類
(男物) ホカロン、
医薬品
募集中!!

炊き出し準備 連日11時集合。炊き出し連日午後6時配食準備、午後7時配食。

医療テント24時間体制。連日夜間パトロール、深夜、昼間も有り。夜は頑張れ越冬コンサート、新春映画祭など。31日は年末大イベント、3日は新春餅つき大会など仲間を励ます企画が今年も盛りだくさん。都合の時間に是非中央公園に!

●越冬カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.gambanpo.net/>「ガンバNPO」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけ、そこから寄付ご協力をお願いに入ってください。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物及びカンパ物品送付先は以下の住所にお願いします●

★郵便物及び衣類、毛布、ホカロン、医薬品、米などのカンパ物品は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号NPO新宿気付 新宿連絡会 宛て

(平日9時~5時で受取が可能です) お願いします。